

Riding for A Cause

# チャリティーという乗り方

— 市民サイクリストが提唱するファンドレイジングの醍醐味

自転車に出会って数年が経ち、ロングライドもそれなりにこなせるようになった。レースにも何度か出場した。でも「距離や記録を伸ばすだけじゃない乗り方があっていいのでは?」と感じる今日このごろ……。今回はそんな自転車人のために「チャリティーという乗り方」を紹介する。「フツーの」サイクリストたちが、小児がんの子どもとその家族を支援するNPO「タイラー基金」と出会い、チャリティーライドを実現するまでを追った。

取材と執筆＝川上澄江



東京のサイクリストクラブ Half-Fast Cycling のメンバーをはじめ、多くの自転車仲間が乗鞍に駆けつけてくれた <http://halfastcycling.com/>



Shine On! Cycle Challenge in 乗鞍2009



タイラー基金の活動に感銘を受けたコリン・ランドルさんは家族や友達6人で参加した

村山晶子(38歳)。都内のサイクリストのクラブ、ハーフ・ファースト・サイクリングに数年前から参加している。このクラブは名前のおおりに「レーシングチームほど速くはないがそこそこ乗れる」サイクリストを中心としており、都心を起点とした50kmから100kmほどの週末ライドが主な活動だ。ときにはロングライドや自転車旅行にも出かける。まったくの初心者だった晶子も100km超のライドも軽くこなせるようになった。自転車仲間も増え、連休を利用した超ロングライドも企画段階からかわるようになった。「週末はライド三昧」の日々を送っていた晶子だが、いつしか「自転車は好きだけど、このままでいいんだろうか?」と漠然とした焦燥感を抱くようになっていた。それが今年1月、恒例としている友人のお墓参りの際に「無念だけとは言い切れない深い気持ち」となって胸を締めつけた。その友人は9年前、心臓発作で急死した。博士号を取得するという自分の夢に向けて、猛勉強をしていたのに、なんの前触れもなくその人生を絶たれることになったのだ。それに比べて、「自分は生きることができているのだろうか」。そんな疑問となつて晶子を苦しめた。

そんなとき、サイクリングの仲間エド・ポクネーから一通のメールが届いた。「自転車を通してチャリティーをやらないか」と数人の仲間に呼びかけたものだった。エドは2007年、第1回の東京マラソンが開かれた際に、小児がんの子どもとその家族をサポートするNPO「タイラー基金」のための募金活動を考案した、東京在住の外国人ランナー9人のうちのひとりだった。

## 「チャリティー」と「寄付」の違い

日本では「チャリティー活動は有名スポーツ選手がやるもの」というイメージがあるが、欧米では小学生でも自分のスポーツを通して寄付を募ることがしばしばだ。

「僕の育ったイギリスではファンドレイジング<sup>※</sup>はもっと日常的なもの」とエド。彼自身、年に1回は何かしらのレースに参加して、ファンドレイジングをやってきた。友人はそんな彼をサポートしてくれるが、その代わりに彼も友人たちのレースの際にはサポートする側にまわる。自分がレースでお金を集めるのは年に一度でも、通年何かしらの活動にかかわっているようなものだ。これは「ある意味、カルマのようなものなんだ」とエドは言う。

※ファンドレイジング(資金調達)とは、レースやイベントの参加者が参加費の一部を社会的な目的(cause)のために寄付したり、家族、友人、同僚などにサポーターになってもらい寄付を募ること。



5 標高2700mの畳平までは約20kmの上り。白樺林から頂上付近の残雪が見え隠れする



4 サイクリストにも人気の高い乗鞍のペンション「ノーススター」<http://www.ridenorthstar.com/>



8 リーダー村山晶子(左)と参加者の貴志縫子(右)



7 みんなで闘病中の子どもたちにメッセージを書いた



6 この日の東京の気温は30度。一方、乗鞍の残雪残る山頂には爽やかな風が

ところが、企画が走りだしたとたん、エドに突然海外転勤の辞令が降りた。これを機に「シャインオン！ サイクルチャレンジin乗鞍」と名のついたこの企画は、晶子をリーダーとする仲間たちの手に託されることになる。

「スポンサーへのアプローチや金銭的なこととなると、わからないことばかり。話を持ちかけた企業からも丁寧なお断りが続き、外国人の間で

800万円以上の寄付が集まった。「僕たちの試みはマラソンでは名前が知られるようになったけれど、僕自身がケガをして、ランよりも自転車に重点をおくようになってから、自転車でも何かできないかと思ったんだ」とエドは言う。「初年度さえ乗り越えれば必ず後に続く人が出る。一緒にがんばろう」というエドの呼びかけに、晶子をはじめ何人かが協力を申し出た。

もっとも正直なところ、独身で子どももない晶子にとって、当初は小児がんと聞いても現実味が薄く「どこか遠いところのお話」のようだった。むしろ「自転車なら自分の時間を割いてまで無理に貢献している感じはしないし、楽しくできるかな、という気持ちだったんです」と晶子は言う。話し合いの結果、場所は日本一標高の高い道路がある乗鞍エリアに、2泊3日のライドの参加費のうち20%は寄付金に、という方針が決まった。

オープンに行なわれている「チャリティー」と、日本人にとっての「寄付」には大きな隔たりがあることを実感しました」と晶子は言う。

### がんを宣告されたダンとの出会い

しかし、苦勞した10倍以上もすばらしい経験ができた。まずは宿泊先を選んだ「ノーススター」のディレクター、ダニエル・ジャンカー氏(以下、ダン)とそのスタッフとの出会いがあった。「去年、みんなで乗鞍に登ったときからいい宿だとの噂は聞いていたのですが、そのときは予約がいっぱいでした。これは何かの縁かもと声をかけたんです」と晶子。ライドの趣旨を話すと、スタッフ全員がとても協力的な態度で接してくれた。ノーススターは日本のヒルクライムレースでは最高峰ともいわれる「全日本マウンテンサイクリングin乗鞍」(8月)の宿泊先としても人気があり、ロードやMTBのツアーをはじめ各種アウトドアのアクティビティも行なっている。松本生まれ、松本育ちのアメリカ人・ダンも自転車をこよなく愛するアウトドア派だ。ノーススターはMTBツアーが主流だが、「ロードは小学校のころから乗っていますよ。当時はまだ珍しかったブリヂストンの『ロードマン』に憧れて、お小遣いをためて買ったんです」とダン。自称「坂バカ」のダンにとって乗鞍は最高の



タイラー基金理事長・キンバリー・フォーサイスさん

10



タイラー基金はがんの闘病中の子どもたちやその家族を支援する活動をしている <http://www.tylershineon.org>

11



がん病棟の子どもたちから届いたメッセージを背中につけて出発

9



ツール・ド・フランス2009での活躍でファンを魅惑した別府史之選手はタイラー財団のサポーターでもある  
写真提供=Makoto AYANO <http://www.cyclowired.jp/>

12

遊び場でもある。しかし、ここまで協力的なのはなぜだろう？ 不思議に思った晶子が尋ねると、ダン自身が昨年9月、突然、悪性の皮膚がんを診断されたのだ、という。

「突然、目の前にストップウォッチを置かれ、余命を逆算されているように感じました。落ち込み、悩みもしましたが、自分が何のために生かされているのか、何ができるのか、と考えるきっかけとなりました」とダン。

ノーススターは「REAL ADVENTURE REAL LIFE」（「本気の人生こそ本当の冒険」）をモットーにしてきた。が、「がんとの闘いも真剣な冒険」とダンは言う。

「現代人はみんな仕事がつきつくて、自分ごと、人のことを振り返る暇がないでしょう？ だからこの宿は『大自然の中の冒険を通して大胆に遊べる場』にしたかったんです。

がんはある意味ではメンタルな病気で、信念を持ち、家族に愛され、仲間と苦しみを分かち合えば、自然と免疫が上がり病気と向き合つことができる。自分も逃げないで大胆に冒険してみよう、と」

偶然にもこのとき、ダンはリブストロングと共同のイベント企画を進めていた。これはがん克服後ツール・ド・フランスで前人未踏の7連覇を果たしたプロ選手、ランス・アームストロングの主催する団体のイベントで、がんの治療や予防の活

動を目的とするものだ。LIVE STRONGの黄色いアームバンドは世界的にも知名度が高いのに、日本ではイベントの実績がなかったのだ。ダンはその第1回を乗鞍に持つてこようとしていた。タイラー基金の話聞いてあっさり協力を引き受けたのも、そういう経緯があったからだ。

### なんとFUMYからメッセージが！

一方、タイラー基金の創立者であるキム・フェリスとマーク・フェリスは、息子タイラー君を2005年に白血病で亡くしたのを機に、「息子の笑顔を無駄にしないために何かしたい」という願いを込めてこのNPOを立ち上げた。

タイラーは生後間もなく救急車で都内の病院に運ばれてから、2年に及ぶ闘病の後に短い人生を閉じた。その間、母親のキムは病院と自宅の往復を続けていた。フェリス家にはタイラーの上にも娘がいる。90年に来日以来、ずっと日本に住み、日本の生活には慣れてきたキムだったが、幼い娘を抱えながら、息子の闘病生活を支える毎日は試練の連続だった。

「医師やスタッフはとても親切でしたが、病院が生活の場となっている子どもたちやその親にとって、その環境はとても喜ばしいものではありません。そんな経験から、ただでさえ苦しい闘病生活を送っている彼ら



川上澄江  
ライター、ニュース翻訳者として、英文、日本語メディアの両方で活躍中。トライアスロンの練習も兼ねて、自転車三昧の日々。

を、少しでもサポートできないか、と思ったのです」

その一環として、今年4月、都内に「シャインオン！ハウス」を設立した。この施設には両親が病院で子どもの看病をしている間、兄弟を安心して預けることができるよう、保育士が常駐している。また、タイラー基金の臨床心理士が、入院中の子どもやその家族のためのカウンセリングサポートも行なっている。

タイラー基金は多くのアスリートとの交流があるが、そのなかに2009年のツール・ド・フランスで史上初めての日本人完走者となった選手2人のうちのひとり、別府史之（FUMY（フミ））がいる。なんと、乗鞍ライドの数日前に、ツールに参戦中のFUMY本人からビデオメッセージが届いた。「今回は一緒に走ることができずに残念です」という短いメッセージのなかに、厳しいスケジュールの間を縫ってメッセージを吹き込んでくれた彼の思いやりとチャリティーへの熱意を感じた、と晶子。

こうした出会いは晶子自身ががんという病気を考えるきっかけにもなった。人を誘うからには基金が何をやっているか知らなければと思い、シャインオン！ハウスを訪問したときのこと。抗がん剤のせいで免疫が下がっている子どもが多いことから、遠くから見守るのが関の山なのだ、子どもたちが一生懸命に病気を

と闘っている姿に心が痛んだ。

「最初はライドのことだけで精一杯で、その趣旨まで考える余裕がなかったけれど、子どもたちの姿を見てからは健康である自分ができることとは何か、と本気で考えるようになりました」と晶子は言う。

### 万年雪との遭遇！

宿の予約をとった時点では20人も参加者が集まるかどうか不安だったが、人数が足りないという聞いて練習ライドの途中で偶然会った人たちが「白馬の騎士」のごとく駆けつけてくれた。タイラー基金からも子どもたちが書いた「がんばって」のメッセージカードが届けられ、参加者はこのカードをバイクジャージにつけて走ることに……。

2日目はあいにくの雨で乗鞍エコーラインは閉鎖、頂上へのアタックは翌日に延期となった。しかし、この日に参加者全員がそれぞれ、子どもたち60人に向けたメッセージを書いた。

翌日は打って変わって晴天。標高1500mの乗鞍観光センターからゴール地点2700mまでの距離は20km、標高差約1200m、最大斜度15%と決して楽なルートではない。しかし、このライドの目的は速さを競うのではなく、みんなが何かをする喜びを知ってもらうこと。そのため事前に練習ライドを数回行ない、当日も「ゆっくりチーム」は20分ご

とに休息を入れながら走った。

ライド歴3年の貴志縫子（31歳）も今回は「ゆっくりチーム」での参加。「とにかくきつい、と繰り返して聞かされたり、トレーニングライドがあつたりと、事前の『脅し』が効いたのか、当日は楽しく上れました。リーダーがペースメイクしてくれたうえ、途中、メンバのペースにばらつきが出てきたときは、できるだけグループがひとつになるように調整してくれました。そういうときに、おしゃべりしたり、写真撮影したり、お菓子を食べたりして、楽しむ雰囲気を保たれていました」と言う。

白樺林のなかを抜けるエコーラインからは壮大な景色が見られる。上るにつれて連なる山々に抱かれる感じがする。しだいに木々が低くなり、森林限界を超えると万年雪に手が届く（この日、東京の最高気温は30度だった）。

「空の青、木々の緑、滝、硫黄の匂い、岩肌、万年雪、頂上付近の爽やかな冷風など、五感を刺激される体験は本当に素晴らしかったです。またチャリティーならではの一体感も感動的でした。出発する朝、自転車を用意しているときには、不思議な一体感と心地よい緊張感を覚えました。普段のライドでは記録更新やエクスサイズなど、それぞれが異なる目的を持っているのに比べ、このライドでは少なくともひとつの目的を自然とみんなが共有しているのだな

と感じました」と縫子。

### 善意の輪が広がっていく

さて、ライドの舞台となったノーススターは9月、ランス・アームストロング基金の「リブストロング・センチュリーライド」のスポンサーとして活躍した。リブストロングイベントとしては日本初の試みで、20人が参加した。

乗鞍岳を一周する160kmのルートはサイクリストの憧れの的だが、傾斜もきつく距離も長いことから「できないだろう」とあきらめてしまつた人が多いとダンは言う。だからこそ、「肉体的なチャレンジを共にすることで仲間の大切さを知ってもらうこと」を目的としたのだという。「たしかに辛いコースではあるけれど、みんなとてもいい顔をしてましたよ。日本ではガンの話はしてはいけない、というイメージがあるけれど、私はオープンに話し合うことが大切だと思うんです。こうしたイベントを通して『ひとりで苦しまなくてもいいんだよ』というメッセージを発信していきたいし、それこそが自分にとっての冒険なんです」

乗鞍は来年もノーススターを拠点にこうしたチャリティーライドの舞台となるだろう。晶子は、「今回は外国人の参加が多かったけれど、今後こうした流れが日本人サイクリストの間にも広まっていくとすれば」と話している。